

遠藤次郎氏のご逝去を悼む

真柳 誠

元本学会代議員で元東京理科大学薬学部教授の遠藤次郎氏が、本年8月22日にご逝去された。享年79だった。私的なことはほとんど公開されなかったのですが、わたしには以下の略歴くらいしか分からない。

1943年、静岡県生まれ。

東京理科大学薬学部卒業。日本鍼灸理療専門学校卒業。

薬剤師、はり灸師。薬学博士(東京薬科大学)。財団法人アジア救済協会インドセンター薬局長。東京理科大学薬学部助手・同講師・同助教授を経て、2005～09年度に同教授。

わたしは遠藤氏より7年ほど年少で、理科大学薬学部の卒業研究で生薬学を選択したとき遠藤氏は助手だった。以来、遠藤氏とは50年弱の交遊があり、思い出は尽きない。のち遠藤氏と結婚された故中村輝子氏も当時は助手だった。お二人には公私にわたる手ほどきを受け、わたしが中国に私費留学した3年間は金銭援助もいただき、まことに感謝の言葉もない。当初、われわれ卒研生が遠藤先生と呼ぶと、それは困るので遠藤さんと呼ぶように言われた。以来、今日まで遠藤さんと呼んできたが、この追悼文では遠藤氏と称する。

卒研では植物解剖学を指導いただき、鏡検で組織・細胞などを描くとき、「心眼」でみるよういわれた。われわれの鏡検図が平面的だったため、遠藤氏がインドで描いたのをみせてもらえると確かに立体的にみえる。顕微鏡のピントを視野の奥から手前に動かしながら描くとそうなることを次第に会得した。また『本草綱目』や中薬学書も参照した生薬のゼミは、漢文や中国語を自力で読解する初体験だった。『傷寒論』の重要条文を抜粋した



遠藤次郎氏

解説も受講したが、当時はなにも理解できなかったと思う。

わたしが1983年に中国留学からもどり、北里東医研で医史学に従事するようになると、学会や研究会で会う機会が多々あった。ある時ぎっくり腰で寝こんでいると、これを聞きつけた遠藤氏が拙宅に来訪され、治療いただいたことがある。わたしの両手の指を一本ずつ指先にむけてこすり、あたかも邪気を排出させるようだった。これを5分

か10分ほど受けたところ、即座に腰痛が消失して立ち上がれるようになった。どうして治ったのか今も不思議でならない。

1995年に北里東医研から茨城大学に転職するかどうかを遠藤・中村氏に相談したところ、それは是非とも茨大に行くのがいいとのこと。今から思うとたしかにそうだった。遠藤・中村氏は2000年ころから、『日本医史学雑誌』『漢方の臨床』『日本東洋医学雑誌』などに医史学論文を多数投稿されている。テーマは日中医学の各面にわたるが、田代三喜と曲直瀬道三の歴史を再検討した研究が出色で、まさに画期的だった。

わたしが茨大を定年退職して横浜に戻ってからは、卒研同期生だった4名ほどで年一回遠藤氏を囲んで会食していたが、コロナ禍でとだえてしまっていた。ほかにもいくつかの研究会で同席することが年に数回ほどあったが、それもコロナでなくなってしまった。

最後にお会いしたのは2022年秋頃の研究会で、容貌の変化に喫驚したのを覚えている。遠藤氏はずっと坊主頭だったのに、なんと髪も髭も伸ばし放題で、それが真っ白でまさに仙人の風貌だった。コロナ禍から二年ほど野田市の自宅から東京まで外出しなかったとのことで、この心境を22年9月発行の薬学部同窓会会報「恩師からのたより」に吐露している。その末尾に、「なお私は仙(千)人を目指すのはやめにしています。九百人を目指します。なぜって、「九」は究極の数字。「九」の次は「0」。「0」は、登仙してあの世にいつし

もう数字だから。最後に皆様にご送ることば「行健不息」、休まないで歩け!」という。まさにびっくりで、わたしは遠藤氏が本気で羽化登仙をめざしていると気づいた。そもそも「九が究極の数字」というのは中国哲学でのことなので、このエッセイは遠藤氏の卒業生にむけた最期の「たより」のつもりだったらしい。

氏の絶筆はおそらく本誌69巻1号(2023)に寄せた「医史学と私」だろう。遠藤氏が現在にいたった経緯を順次整理され、九つの「踏み石」という初段の最後はコロナ禍だという。その対策として「天地人三才の哲学」に則って実践したとのこと。たぶんあの風貌で散歩しながら頭上から天気、両足から地気を吸収し、両者を体内で循環させつつコロナへの免疫をつけたのに違いない。このため氏が執筆していた700頁ちかい『霊枢、素問の構造と論理』の全面改訂がすすまず、未出版のままが残念だという。わたしも残念ではない。ただその骨子を以下の9点に整理し、簡潔に説明している。「陰陽形気論」「陰陽の対立」「五運六気論」「陰陽五行論」「四診」「易の構造」「天門地方の交流」「九鍼論、九野論」「小鍼」。これを何とか出版できないものだろうか。

遠藤氏の葬儀は8月26日に桐ヶ谷斎場で割合簡素にとりおこなわれ、遺影はあの風貌の写真だった。棺によこたわる氏はまさにぬけがらで、登仙の本懐をとげたのだらうと感じた。わたしも見なりたい。遠藤さん、そのうち仙界で会いましょう。